

昭和初期、
積雪と冷害に苦しむ農村に
ひとすじの光明

旧「農林省積雪地方農村経済調査所」

国登録有形文化財



雪調庁舎は、雪下ろしの必要がない急勾配の切り妻屋根と、三角のドーマ窓が特徴。昭和12年に建築、設計は今和次郎である。

平成26年4月25日、

旧農林省積雪地方農村経済調査所庁舎（以下「雪調庁舎」）が国指定登録有形文化財への登録告示がありました。

登録を記念して、雪の里通信記念号を発刊し、雪調が担っていた使命や歴史、雪国の救済のため尽力した人物を紹介します。

全国に類を見ない事業所「雪調」

昭和初期、積雪の苦に加えて繰り返す凶作のため疲弊しきつていた農村経済を更生させるために調査・研究・指導を目的とした全国唯一の役所として積雪地方農村経済調査所（以下「雪調」）が、農林省の出先機関として新庄に設置された。

モデルとすべき前例がない任務

「研究の組織化、体系化」

全国初の事業所ということは、とりもなおさず、先人が手をつけたことのない領域の研究課題に取り組む使命を負っていたということである。

雪調の業務は、①農村経済係、②副業及び農村工業係、③積雪研究係の三部署で構成されており、それぞれの業務の遂行にあたっては、農業経済学の東畑精一や低温物理学の中谷宇吉郎、建築学の今和次郎、哲学者で民芸研究家の柳宗悦など、各界の第一線で活躍している研究者を糾合して実践的な研究が進められた。

雪調は、雪に関する研究に組織的総合的に取り組み唯一の国の機関として、情報を全国から収集し発信する拠点となり、

その名を広く世に知らしめた。今日、雪氷研究における用語の「しまり雪」「ざらめ雪」などの雪の分類名は、雪調を拠点とした研究組織において定められたものである。これらをはじめとする各種の標準化によって研究の体系化が促進され、その後の雪氷研究が発展する契機となった（これらの分類名は、民俗語が学術語として採用されている興味深い例である）。

更生・救済の使命を終えて

雪調は、戦後の産業経済の変化に伴う国の機構改革によって、事業所の名称も含めていくたびかの変遷を辿ることになる。そして、最後の業務も上位部署に統合となり、昭和57年度を限りに役目を終えて半世紀の歴史に幕が降ろされたのである。

雪の里情報館を知っていますか？

雪の里情報館とは、国の機構改革によって閉庁となった庁舎を新庄市が貴重な資料とともに譲り受けた施設です。現在は4万7千点の資料と図書を所有し、資料の公開と常設展示を無料開放して

雪の里情報館

新庄市石川町4-15

TEL 0233(22)7891

■開館時間 午前9時～午後5時

■休館日 月曜日、12/29、1/3

雪調の果たしてきた業績を永く後世に伝えるとともに、雪のふるさとづ

「雪調」設置までの道のり

雪害救済運動の先駆者

松岡俊三の偉業

山形県楯岡（現村山市）出身の衆議院議員松岡俊三（1880～1955）先生は、雪国の歩みを語る上で欠かせない人物である。

松岡先生は、大正末から昭和初めの雪国農村の窮状を目のあたりにして雪害救済の必要性を強く感じ、政府に対してそのための施策を強く訴え続けた。それはやがて政府を動かし、雪国に暮らす人々の生活を向上させる道を拓くことになるのである。

雪も台風、洪水と

同じ自然災害

訴えの趣旨は、積雪と寒冷による各種の被害や不利益は、台風や洪水などと同じ自然災害であり、国として救済すべきだというものである。

この考えに対する理解を広めて、救済を求める民衆の運動に高めようと、厳冬期に身の危険をも覚悟して豪雪の

各訪問地に向けて、「雪中行脚」に出たのである。

雪の害に関する実態調査と、啓蒙つまり雪により被害や耕作上の不利に対する諦念から人々を解き放つことに力を注いだのである。

その後、自らの足を駆使した調査で明らかにしたことにもとづいて、政府に対して救済の必要を実証的に訴え続けた。



▲「雪中行脚」に発つ時の出で立ちの松岡俊三

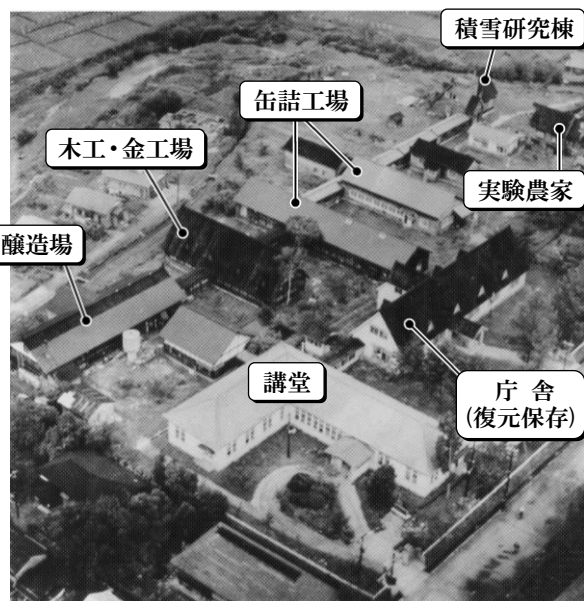
その不撓不屈の活動はついに国を動かし、東北全市町村に「特別市町村」として交付金を増額するなどの法令が昭和7年に成立し、救済が国の施策として初めて施行されることとなった。

その一環で、積雪地方農村経済調査所は翌8年に、わけても、松岡先生の訴えに共鳴し熱く支持した新庄に設置されたのである。こうして、雪国の窮状を国として救済し更生させる道がようやく拓かれたのである。

その後の雪国振興施策の進展は、終戦を経て新潟県を拠点に設立された（日本積雪連合）の請願で実現しつつ現在に続いているが、それというのも、戦前に松岡

俊三先生が先駆者となつて政府を動かす潮流を

起こしたからであるといえる。



▲実習のための一大工場群／積雪地方農村経済調査所全景

今和次郎と実験農家



▲今 和次郎

雪調における特徴的な実践的研究の一つに「実験農家」がある。それは雪下ろしと下ろした雪の片付けから解放されれば、その労力は現金収入のために鉄道の除雪などに充てる

ことができ、一家の家計は成り立つのではないかとということを検証するものである。そのために、建築家、今和次郎に設計を依頼して高床で急こう配の屋根の家屋を建て、そこに標準的な

一家（家族構成、耕作面積）に通年で生活してもらった。果たして、家計の収支は黒字になり、仮

▼実験農家の模型展示



▲一家が試験移住した実験農家

説は検証されたというものである。

当時の農村住居に共通する採光や通気など衛生面の課題も考慮した設計であったことは当然である。この型は、現在普及している克雪型住居の原型となっている。

“雪調”国指定有形文化財登録記念号

雪の里通信第20号

発行

雪の里情報館

新庄市石川町 4-15

0233 (22) 7891